

ミライのフツーに 向かって

山村と都市が共存する豊田市で、どんなミライをめざしていくのか。そのミライのフツーをどのように作っていくのか。おいでん・さんそんセンターを運営する(一社)おいでん・さんそんの正会員に想いを語ってもらいます。

第1回 加藤栄司さん

(一社)地域問題研究所 研究理事、愛知県交流居住センター事務局長、農学修士、技術士(農業部門、建設部門)、(一社)おいでん・さんそん理事



「半農半X」という概念が世に登場して四半世紀以上も経過している今日、その言葉は、国の農政に取り上げられるようになり、政策的意味合いが加味された形で注目されつつあります。

愛知県でも令和3年度から「半農半X支援事業」に着手。(一社)地域問題研究所と(一社)おいでん・さんそんのコラボで県内の半農半X実践者を取材してホームページと冊子を作成する業務を受託しました。その結果、とても多彩な半農半X実践像が浮かび上がりました。

米、ホップ、野菜、果樹、ハーブ、卵など人によって扱っている農産物は多種多様。自家消費や直販であったり、料理や加工してお店に出したり、家庭菜園レベルの人から専業農家のように大規模な人まで千差万別です。一方、「半X」の面も、神主、ラッパーやファシリテーター、庭師や土木作業、養殖や塾講師、カフェや居酒屋など、実にバラエティに富んでいます。

実践者に共通するキーワードは、「自分のやりたいの実現」、「飢えることのない安心感」、「自然や地域社会との共生」、「つくる暮らし」、「半農と半Xの相乗効果と親和性」、「誰かに委ねる暮らしではない切り拓く生き方」、「捨てることなく使い切る営み」でした。

生命としての人間の根源である食と直結した半農半Xな暮らしは、これからの時代にふさわしいミライのフツーを予感させる働き方や生き方ではないでしょうか。そして、その先駆けは山村地域にこそあるのではないのでしょうか。

募集情報

2022年度 あいちの山里アントレワーク実践者募集

愛知県の三河山間地域で、起業等により地域課題解決に挑戦する人を募集します。地域を理解し、優れたビジネスプランを持ち、事業活動を実践できる人を愛知県・地元市町村・関係団体などと連携してサポート。シェアオフィスでの専門家による指導、資金面での支援などにより、ビジネスプランの実現とローカルベンチャーとしての飛躍を支えます。

アントレワーク実践者募集スケジュール

- 募集期間 2022年4月18日(月)～5月31日(火)17時まで
- 支援内容 月額20万円(各種手当、通勤費等全て含む。月額手取り約14万円)及び、終了時に事業支援金として40万円(諸費用含む。手取り約29万円前後)
- 支援期間 2022年7月1日(金)～2023年3月31日(金)
- *第一次審査…6月17日(金)(書類選考) *第二次審査…6月中旬(決まり次第通知) ※今後の新型コロナウイルス感染症の状況等により変更する場合があります。

オンライン説明会(事前申込制個別実施)

- 申込期限 2022年4月28日(木)17時
- 以下の内容を記載の上、電子メールにて申し込みください。
5月2日中に詳細説明資料及びヒアリング日時を電子メールにてお知らせします。

■メールの件名:2022年度アントレワーク実践者 詳細説明資料希望

■本文中に1～3を記載してください。

1.名前(団体・法人名) 2.連絡先(携帯電話・メールアドレス) 3.希望する個別ヒアリング日(5月6日(金)～5月16日(月)のどれか1日) ※個別ヒアリングは、各人約30分程度、オンラインソフトzoomを使用して実施します。通信環境の良い場所で、カメラ付きPCもしくは、スマートフォンにて御対応願います。※今後の新型コロナウイルス感染症の状況等により変更する場合があります。

●問合せ・応募提出先

株式会社CBCクリエイション営業戦略センター

[MAIL]

三河の山里サポートデスク info@spdesk.mikawayamazato.jp

[TEL] 052-251-1181(平日9:00~17:00)

[FAX] 052-252-0070

詳しい情報、他のイベント情報は

おいでん・さんそんセンターホームページ

『イベント情報』をチェック!



「まちとむらをつなぐ」おいでん・さんそんセンターの活動をご紹介します!

おいでん・さんそんSHOW

5月号
2022.05.01発行

PICK UP

移住でも観光でもない新たな交流、関係人口とのミライの地域づくりを考える



「ソトのチカラと一緒に地域活性化」セミナー開催



『関係人口』という言葉、みなさんご存知でしょうか?豊田市では「外から地域を継続的に訪れ、住民と関わりを持つ人材」と定義しています。移住でも観光でもない新しいカタチで地域に関わる人たち、しかしながら山村地域においては実際に関係人口をどのように受け入れれば良いのか、どのように関わってもらえば良いのかイメージしづらいのも事実です。

そこで、3月26日(土)に下山基幹集落センターにおいて地元住民を対象とした『おいでん・さんそんセミナー～ソトのチカラと一緒に地域活性化～』を豊田市企画課とおいでん・さんそんセンターで開催しました。

初めに豊田市役所企画課が、1月に施行された山村条例について説明し、次いでセンターより8年間で山村地域とまち側の交流事業を約300件コーディネートしてきた事例などを紹介したほか、市内山村地域の3団体の代表者にキラリと光る関係人口の取組の事例発表としてご紹介いただきました。当日はあいにくの天気ではありましたが、下山地区の地域づくりに取り組んでいるみなさんを中心に25名の参加があり、関係人口による地域づくりの取組に対する関心の高さが伺えました。

ここからは、事例の発表内容についてご紹介します。

もりわかがる

森若蛙の会×羽布まちづくり委員会

一番手は、羽布自治区有志により炭焼きを行っている「森若蛙の会」の川合寿佳さんです。山村地域の暮らしと共に培われた炭焼きの技術や伝統を後世に残そうと、2015年に会を設立し、2020年には炭窯も自ら製作しました。

ゼロからのスタートで、基本的な技術習得するうえでかなりの失敗をしてきたこと、炭窯の構造も研究を重ねてきたことなど苦労した経験をお話いただきました。豊田市のわくわく事業に「里山薪炭塾をやりたい」というテーマで補助申請し、当初より都会の方との炭焼きを通じた交流も視野に入れていたそうです。「薪を使って焚き火をしたり、実際に炭を焼いたり使ったり、里山の生活を取り戻すようなことをやっていきたい」と、思いをお話いただきました。

そして次に、今年1月に同会の協力を得て開催した「炭焼き体験会」について、「羽布まちづくり委員会・景観チーム」の川合晃司さんに紹介いただきました。同チームは、羽布自治区プランに基づいた5年間の計画に位置付けられ、景観を



(左) 栃本町桜の森づくりの発表でのスライド(中) 栃本町の桜の森づくりの発表を行った天野さん、倉田さん、本藤さん(右) 押井営農組合

構成する地域の農地や山林を管理して住む人、そしてこちらに訪れてくる人にとって持続的で魅力のある地域にしていきたいと活動を行なっています。炭焼き体験会はその活動の一環で、初めての試みに関わらず参加者が20名以上と反響があったこと、当日は窯からの炭出し、原木の薪割り、窯への薪入れと火入れまで半日ほどで体験でき、参加者の満足度も高かったことなどをお話いただきました。

今後について、参加者との交流のなかから「火の番をしてみたい」という声もあり、イベントだけではなく、普段の営みを見ていただくということが大事だという気づきがあったそうです。「まちの人と継続的に取り組める関係性を構築するにはどうしたらいいか、また地域の理解や意識をどうやって醸成していくのか考えていきたい」と話していました。

栃本町 桜の森づくり

『あいち森と緑づくり事業』により整備された地域の山は整備後に地元で管理することが条件となっています。しかしこれまでのように集落単独での管理では、山は元の姿に戻ってしまうことが危惧されました。そこで本藤孝男さん、倉田富夫さん、天野正直さんはまち側の住民に呼びかけ、地域住民と共に花木を植えることで美しい山里を守るというアイデアを考えました。

平成30年3月に実施した『第1回桜の植樹祭』には地区外から13家族39名が参加し、みんなでソメイヨシノを植樹、そして、植えた桜には家族の名板を付け『MY桜』として愛着を持って育ててもらえるよう工夫した結果、地域住民と関係人口との交流は大いに盛り上がりました。

その後、草刈り作業や芋掘り体験などにより交流の幅が広がる中で一つの転機が訪れます。まち側の住民からの「マウンテンバイクのコースを作りたい」という要望から栃本町内にマウンテンバイクコースを整備、『おいでんトレイル足助栃本』と命名され、イベント開催時には多くの子どもたちで賑わい、子どもが少ない栃本町に活気を与えています。また、この時は地域の里山を利用するにあたっての

協定書をまち側住民と締結し、利用に関する決め事や地域行事への参加など、関係人口との良好な結びつきを持続する工夫を行っています。その後も原木シイタケ栽培体験やクライミングなど、多くの関係人口が栃本町と関わり、地域に活力をもたらしています。

関係人口をお客様扱いせず、常に意思疎通を図り積極的に受け入れることで互恵関係の輪を強固にすることが、地域の将来に向けて重要だと結んでいました。

押井営農組合

代表理事の鈴木辰吉さんよりご紹介いただいたのは、集落を消滅の危機から救う「自給家族」、「源流米ミネアサヒCSAプロジェクト」(※CSAとは: "Community Supported Agriculture" の略で「地域支援型農業」)。森と谷間の僅かな農地しかない人口78人の押井町で、3千年も営まれてきた人々のくらしは、まさに食の自給の歴史です。それが、たった50年の社会環境の変化により消滅に向かおうとしています。農の営みを諦めた時、集落は消滅に向かう。売るための米を作る農業経営は、中山間地域では厳しいけれど、自給の営みなら続けられます。

地域で知恵を絞り、「地域まるっと中間管理方式(※)」で安心・確実に農地を集約化、クラウドファンディングを活用してライスセンター・保冷庫などの設備を拡充し、「つながりによる消費」を指向する家族と長期栽培契約をする「自給家族」は非常に先進的な取組です。また、自給家族の契約者(現在66家族)が地域の住民と自然観察会をしたり、フクロウやミツバチの巣箱を設置するプロジェクトや、集落のお祭りにも参加する様子も紹介され、関係人口との深い関係性が感じられました。

生産者にとっては農の営みと農地を守り、関係人口との交流で地域が活性化でき、消費者にとっては安心で美味しいお米を食べられ、山村との交流で暮らしを豊かにできる。生産者と消費者が直接つながって双方が幸せになるこの「自給家族」の取組は、昨年、農水省の「ディスカバー農村漁村の宝」に選定され、農地の保全のみならず関係人口とのつながりの強化による地域コミュニティの存続に繋

げる好例として、今後ますます広がっていくことが期待されます。

今回ご発表いただいた事例は関係人口の取組をスタートさせた導入事例としての「森若蛙の会×羽布まちづくり委員会」。関係人口のアイデアを積極的に受け入れ、発展的な互恵関係を築いている発展事例「栃本町桜の森づくり」。地域活動や行事に関係人口が地元住民と共に参加し、開かれた自治(オープンコモン)を実践する先進事例「押井営農組合」。それぞれが関係人口との多様な関わりしるを実践例を挙げて発表いただいたことで、参加者もシーン別の関係人口との取組をイメージしやすいものとなりました。

そのためか、事例発表後に実施した事例発表登壇者とのグルーブトークにおいても、参加者から積極的に質問が投げかけられ、それに対する登壇者の回答に熱心に耳を傾ける光景が見られました。

参加者からは「いろいろな地域の取組の発表の中に学び合うものがあり、新たな発想ができる発表であった。またこういった機会があれば、ぜひ参加したい」、「各事例とも特

徴があった。関係人口とのルールづくりなどノウハウがわかってとても参考になりました」と感想があり、非常に有意義なセミナーとなりました。今回、ご参加いただいた地域のみなさんが新たに関係人口と共にワクワクする地域づくりを始めるのではないかと運営スタッフとしてとても楽しみにしております。センターとしてもそんなミライの地域づくりをより一層支援していきたいと思えます。(坂部友隆、松本真実、川端光平)



事例発表者と参加者とのグルーブトークの様子



report 自然の中で、参加者それぞれが自分の時間を満喫!

セカンドスクール2022春フリー版プログラム開催



3月に、豊田市の小学生を対象に、セカンドスクール2022春フリー版の3つのプログラムが開催されました。

20日(日)は旭地区のつくラッセルで「山っこくらぶ」が開催され15人が参加しました。かつて小学校として使われていた校舎を中心に、学校裏にある山で木々や葉を拾い、体育館前のテラスで思いつくままに工作したり、ヤギと遊んだり、焚き火をしながら五平餅づくりをしたり、校長室でトランプをしたりと、参加者それぞれが、自由に時間を過ごしていました。できたものを「見て見て」と自慢する、達成感に満ちた表情が印象的でした。

29日(火)は福武地区で「山のこどもになる!」が開催され、21人が参加しました。今回は地域団体『押山歴史探検隊』のみなさんの案内でMt.押山への登山を実施しました。登山距離としては短いものの、比較的急な所を登っていき、頂上から見下ろす絶景に感動。参加した子どもは「とても気持ちいい!また家族で来たい」と大きな達成感が得られたようです。下山後はせっけんづくりを楽しみ、みんなで焼いもを食べ、充実した1日となりました。

29日(火)~31日(木)は旭地区の農家民宿ちんちゃん亭で「あさひ山里ぼうけん遊び隊」が実施され12人が参加しました。『大人は何も言わない、子どもがやりたいことをやる』など子どもの意思を尊重した自由な雰囲気の中で、

民宿の裏山に登って元気に遊ぶ子もいれば、本を読んでもんびり過ごす子も、それぞれ思い思いに3日間を満喫していました。帰り際に子どもたちからは「また来るね!」ととても満足そうに帰宅した姿が印象的でした。

セカンドスクールは、また夏にフリー版が開催される予定です。ぜひご参加ください。(田中あつこ、川端光平)



(上左)山っこくらぶ(上右)あさひ山里ぼうけん隊(下)山のこどもになる!



(※)「地域まるっと中間管理方式」: 農地中間管理機構を介して集落営農組織に農地の利用権を集約して農地の保全を図る仕組み。